

繰り返す日々はあまりに憂鬱で、ともすれば息苦しさに窒息しそうな世の中だ。世の中のあらゆる隙間に理不尽や鬱屈が横たわっているし、怒りや憎悪を食べて生きる人々が今日も屍のように闊歩する。夏目漱石は『草枕』(913/12/12)の冒頭で「とかくに人の世は住みにくい」と言った。誰もが楽しく生きられるわけではない。

詩を読むことが好きなのも、あるいはそれが現実逃避に最適だからかもしれない。

詩は良い。辛さが極まる大学生の頃は常にポケットに『ヘッセ詩集』(944/H3/I)を入れて持ち歩いてきた。重松清の『ナイフ』で、父親はポケットにバタフライナイフを忍ばせていたが、僕はそれと同じように、ポケットに感じられる詩集の重みで世界と向き合おうとしたのだ。ヘッセの詩集は良い。繊細で、感傷的だ。彼の小説の主人公はみんな、光をそっと反射する薄いガラスようで、ふとした拍子に壊れてしまっそうだ。ここにヘッセの詩の一つを紹介する。

はかない青春

疲れた夏が頭を垂れて、
湖に映った自分の色あせた姿を見る。
私は疲れ、ほこりにまみれて歩く、
並木道の影の中を。

ポプラの間をおどおどした風が吹く。
私の後ろの空は赤い。
私の前には、夕べの不安と、
——たそがれと——死とが。

私は疲れ、ほこりにまみれて歩く。
私の後ろには、青春がためらいがちに立ちどまり、
美しい顔をかしげ、
これから先はもう私と一緒にいこうとしない。

詩集のいいところは、短いところだ。信号が赤に変わるまでの間に一篇を読み切ることさえできる。スキマ時間の有効活用とは、本来こういうことを言うのだと思う。同じくドイツの詩人であればリルケもおすすりめできる。いま新潮文庫から出ている『リルケ詩集』は、前川直による表紙が綺麗だ。綺麗だけれどどこか不可思議で危うさを感じさせるその装丁は、そのままリルケの詩を反映するかのようだ。ちなみに学校には岩波文庫版の『リルケ詩集』(081/11-8/432-2)しか置いていないけれど、個人的にはこちらの方が訳が好みだ。

寂寥

寂寥は雨のようだ
それは海から夕闇こめた荒野に打ち上げ、
人里離れた広野から
いつも寂寥のこめた空にむかって昇る。
そうして空から街の上に降る。

薄明の時間を、雨となって降りそそぐ、
すべての小路が東雲の方角に走るとき。
期待を裏切られた二つの肉体が
幻滅と悲哀とを感じながら離れるとき、

そうして憎しみ合う人と人とか
一つ寝床に眠らなければならぬとき

そのとき寂寥は川となって流れてゆく

目線をヨーロッパ以外に移すと、アジアで初めてノベル文学賞を受賞したのはインドのタゴールだ。正直なところ、私たちがタゴールを完全に理解するのは難しい。なぜなら宗教的な背景が全く違うからで、それはヘッセやリルケでも同じことだ。特に『タゴール詩集』(081/11-8/63-1)なんかは汎神論的な作品も多く、その感覚の違いに戸惑うことも多いのだけれど、その紡ぎ出す言葉の美しさや世界観に酔いしれるだけで十分だろうとも思う。

夜も昼も私の血管を流れる同じ生命の流れが、この世界を流れて、リズムカルに韻律で舞踏している。それは地上で塵をぬけて歓声をあげながら数知れぬ草の葉に迸り、葉と花のざわめく波となって碎ける、あの同じ生命

生と死、引き潮と満ち潮の大海のゆりかごに揺られているのと同じ生命である。私は私の四肢がこの生命の世界に触れることで輝かしくされるのを感じる。

そうして私の誇りは数々の時代の生命の脈拍が、この瞬間に私の血の中に舞踏していることである。

神について歌う詩は世界には多くて、個人的にはスーフィズム的な価値観を反映した『ハーフィズ詩集』(080/11-1/299)なんかも面白いのだけれど、やはり難しいので、もう少しわかりやすいところで同じベルシャの詩人ウマル・ハイヤームによる『ルバイヤート』(081/11-3/4)をおすすりめしておく。

そこに描かれているのは、これでもかというほどの厭世観。そしてそれを打ち破る享楽主義・利那主義。本当にこれが十一・二世紀のイスラーム世界で書かれたのかと疑うほどだ。タイトルの「ルバイヤート」とは四行詩集という意味で、その名の通り全ての詩は四行で構成されているから、本当にちよっとした時間にすぐ読める内容も込み入っていないから、ふとした瞬間にすぐ読める。

神のように宇宙が自由にできたらよかつたらうに、
そうしたらこんな宇宙は碎き捨てたらうに。
何でも心のままになる自由な宇宙を
別に新しく作り出したらうに。

短いので、もう一篇。

歓楽もやがて思い出と消えようもの
古きよしみを繋ぐに足るのは生の酒のみだよ。
酒の器にかけた手をしっかりと離すまい、
お前が消えたって盃だけは残るよ

と、ここまで海外の詩のことを振り返りながら、思う。これは結局のところ翻訳にも依るのではないのかと。心の抉れを埋めてくれるようなヘッセの言葉も、絶望的世界を美しく生きるウマル・ハイヤームの言葉も、本当の意味では理解できないのではないかと。やはりそういった意味でも語学は大事だ。とりあえず英語ならなんとかから、英語の詩を一篇載せてみる。

The Hill We Climb

When day comes we ask ourselves,
where can we find light in this
never-ending shade?

The loss we carry, a sea we must wade.
We've braved the belly of the beast,
We've learned that quiet isn't always peace,
and the norms and notions of what just is
isn't always just-ice.

And yet the dawn is ours
before we knew it.
Somehow we do it.
Somehow we've weathered and witnessed
a nation that isn't broken,
but simply unfinished.

We the successors of a country and a time
where a skinny Black girl descended from
slaves and raised by a single mother
can dream of becoming president only to
find herself reciting for one.

And yes we are far from polished.
Far from pristine.
But that doesn't mean we are
striving to form a union that is perfect.
We are striving to forge a union with
purpose,
to compose a country committed to all
cultures, colors, characters and conditions
of man.

And so we lift our gazes not to what stands
between us,
but what stands before us.
We close the divide because we know, to
put our future first,

we must first put our differences aside.
We lay down our arms
so we can reach out our arms to one
another.

We seek harm to none and harmony for
all.

Let the globe, if nothing else, say this is
true,
that even as we grieved, we grew,
that even as we hurt, we hoped,
that even as we tired, we tried,
that we'll forever be tied together,
victorious.

Not because we will never again know
defeat,
but because we will never again sow
division.

Scripture tells us to envision
that everyone shall sit under their own vine
and fig tree and no one shall make them
afraid.

If we're to live up to our own time,
then victory won't lie in the blade.
But in all the bridges we've made,
that is the promise to glade, the hill we
climb.
If only we dare.

It's because being American is more than a
pride we inherit, it's the past we step into
and how we repair it.

We've seen a force that would shatter our
nation
rather than share it.
Would destroy our country
if it meant delaying democracy.

And this effort very nearly succeeded.
But while democracy can be periodically
delayed, it can never be permanently
defeated.

In this truth,
in this faith we trust.
For while we have our eyes on the future,
history has its eyes on us.

This is the era of just redemption
we feared at its inception.
We did not feel prepared to be the heirs
of such a terrifying hour
but within it we found the power
to author a new chapter.
To offer hope and laughter to ourselves.

So while once we asked,
how could we possibly prevail over
catastrophe?
Now we assert,
How could catastrophe possibly prevail
over us?

We will not march back to what was, but
move to what shall be.
A country that is bruised but whole,
benevolent but bold, fierce and free.

We will not be turned around
or interrupted by intimidation,
because we know our inaction and inertia
will be the inheritance of the next
generation.

Our blunders become their burdens.
But one thing is certain,
If we merge mercy with might,
and might with right,
then love becomes our legacy,

and change our children's birthright.
So let us leave behind a country
better than the one we were left with.
Every breath from my bronze-pounded
chest,
we will raise this wounded world into a
wondrous one.

We will rise from the gold-limbed hills of
the west.
We will rise from the windswept northeast,
where our forefathers first realized
revolution.
We will rise from the lake-rimmed cities of
the midwestern states.
We will rise from the sunbaked south.

We will rebuild, reconcile and recover.
And every known nook of our nation and
every corner called our country,
our people diverse and beautiful will
emerge,
battered and beautiful.

When day comes we step out of the shade,
aflame and unafraid,
the new dawn blooms as we free it.
For there is always light,
if only we're brave enough to see it.
If only we're brave enough to be it.

アメリカという国のすごいところは、大統領就任式で詩人が登壇することだ。そして、「言葉」というものが力が生き残っているところだ。

先日の大統領就任式で登壇したアマング・ゴーマンは22歳の若い詩人だ。いつもならお祭り騒ぎのような大統領就任式が、その日は州兵が取り囲み厳戒態勢で行われていた。それはもちろん直前にアメリカ議会への襲撃事件があったからなのだが、彼女が読み上げたこの詩は、この数年に起こった分断の傷を優しく埋めて、調和を取り戻す足がかりとなるうとして書かれている。

ポイントではないということだ。世界中が同じように傷つけられているし、それは日本でも例外ではない。未来を生きる私たちは彼女の言葉をどう受け止めるべきなのだろうか。この詩が収録される予定の詩集『The Hiii We Climb: An Inaugural Poem for the Country』は3月30日に出版される。

関係ないといえばないし、あるといえばあるのだけれど、前回の大統領就任の際には『一九八四年』(933/01)が売れた(ついでにAmerican Idiotのストリーミング再生数が増えた)。それは当時「フエイクニュース」とか「オルタナティブ・ファクト」とか、そういった単語が飛び交い、世の中が混乱を極めたことと無関係ではないだろう。「1984」の中では「ピック・ブラザー」と呼ばれる絶対君主を一つのシンボルとして様々な思想統制やプロパガンダが横行する。主人公の勤務先は「真理省」と呼ばれる役所で、国家に都合が悪い事実を消去することを目的とする。出版当時は冷戦を背景として広く読まれた小説が、半世紀以上経って再び現実と交差し始めたのだろうか。

SFというジャンルの小説は外から眺めている限り、現実離れた荒唐無稽を描いているようにも見えるが、実際はその逆で、サイエンスというフィルターを通じて現実社会の欺瞞や歪みを描くような作品も多い(もちろんそうでないものもたくさんある)。

昨年発行された『シオンス・フィクション イスラエルSF傑作選』(929/TE)もそういった作品と言えるかもしれない。タイトルの通り、イスラエルで発行されたSF短編のアンソロジーなのだが、これがまた抜群に面白い。そもそも我々とイスラエルの人々とは文化的な背景が違うから、見えてくる風景一つ一つが新鮮だし、民族としてのユダヤ人の自意識が垣間見えるのがまた面白い。

後ろの方に「イスラエルSFの歴史」というタイトルの解説が付けられている、その文章は

「イスラエルという国家は本質的にサイエンス・フィクションの国とみなしてもかまわない」という言葉から始まる。二冊の聖書を原点として生まれた国だということ。そしてこの本に載せられたSF短編を読むと、それももっともなことだと感じられる。

世界の詩を読みながら、聖書や神話の世界に興味が出てきたら『図解 世界5大神話入門』(164/NA)もぜひ読んでみよう。神話や民話は人々の価値観のベースとなっているから、やっぱり知っているると便利だし、楽しい。

あるいは実際に海外なんか飛び出して、色々な価値観に触れるのも悪くはない。まあ今はそれが難しいから本を読もう。本はいい。外に出なくても楽しい。インドア派は本とゲームに限る。

多くの若者をアジアの路上へ駆り立てた罪深い本が『深夜特急』(913/S82/1)だ。別名「バックパッカーのバイブル」。読めば絶対に香港の熱気に包まれたと思う。ガンジスの風を感じてみたくなる。個人的には、北野生がこの本を読んでどこか遠くへ飛び出して行って人生がおかしな方向に転んでいってくれたら、それはとても良いことだと思う。ただし、つまらないヒッピーかぶれになってはいけない。やるなら本気でやれ。かぶれているのが一番いけない。

ヒッピーの源流は50年代半ばのアメリカで生まれた「ビートニク」の思想まで遡るから、少なくともその文学には触れておこう。アメリカという国は広い。そのアメリカを西へ東へ自由に放浪する姿を刺激的に描いたジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』(908/S30/1-1)には次のような一節がある。ヒッチハイクで乗せてもらったトラックの荷台での場面だ。

オハイオのコロンバスから来たシテイ・ボーイのふたりは高校のフットボール選手で、ガムをくちやくちやくと噛み、ウイंकをし、風に吹かれながら歌をうたっていた。「LAに行くんだ!」と声を張り上げた。

「なににしに?」

「知らないよ、そんなこと、どうだっていい」

僕はいつだってこんな風に生きたい。話を元に戻すと、やっぱり母語で文学に親しむことができるのは幸せな話だと思う。翻訳による差異を気にせずに済むというのは良いことだ。

「最近の日本の詩人で勢いがあるのは誰?」と聞かれると、100人中96人は最果タヒと答えるだろう。『死んでしまふ系のぼくら』(911/SA)が出てきたときの衝撃はすごかった。ネット世代が見ている世界を、こんなにも上手く詩という形態に落とし込んだ詩人を僕たちは知らなかった。そういう意味で、詩という世界に現れた一人の革命家だとも思う。

一方、共通テスト界限でざわついたのは、プレテストの素材として吉原幸子が採られたことだ。吉原幸子の言葉はみずみずしい。そして、時に鋭いナイフのような切れ味を見せる。あまりに鮮やかなその言葉が、どういわけが僕たちを優しく包み込んでくれる。『吉原幸子詩集』(911/G16/1-56)は、良い。

空襲

人が死ぬのに
空は あんなに美しくてもよかったのだらうか

燃えてゐた 雲までが 炎をあげて
あんな大きな夕焼け みたことはなかった

穴から這いだすと
耳元を 斜めにうなった 夜の破片
のしかかり 八枚のガラス戸いっぱい
色と色との あらそふ
反射の ぜいたくな 幻燈

赤は 黒い空から
昼の青を曝き出さうと いどみ
紫 うまれ 緑 はしり 橙 ながれ

あらゆる色たち ひめいをあげて入り乱れ

どこからか さんさんと降りそそぐ 金いろの雨

浴びてゐるのは

南の街ぞらか

ガラスのなかのふしぎな世界か

立ち尽くす小さなネロを かこみ 渦巻く

音もない 暗い熱気だったか――

戦ひは

あんなにうつくしくてもよかったのだらうか

どうせだから若い詩人も。「生命の詩人」と呼ばれる沢幸は結核によって二一歳でこの世を去った。彼の詩には「第一に、そこに死があり、死と戦わなければならなかった。そこには死と自分だけしかなかった。」（第一に死が）というフレーズがある。彼が最も活発に詩作を行ったのは十六歳から十七歳のときだ。貧しさで死を背負った矢沢幸の紡ぎ出す言葉はあまりに透明感に満ちていて、それでいて強い輝きを放つから、僕のような人間は時にその内容を直視できなくなるから、彼のような人間は『光る砂漠』(911/Y21)のタイトルを含む詩を一篇。

少年

光る砂漠

影をだいて

少年は魚をつる

青い目

ふるえる指先

少年は早く

魚をつりた

他の現代の詩人では銀色夏生『詩集 すみわたる夜空のよよな』(911/Y1)が図書館に入ったのでおすすめておく。たぶん、この中で一番読みやすい。この詩集ではいちおう「愛」がテーマになっているのだけれど、決して胸焼けするような甘い言葉は続かない。静けさの中に染み入る繊細さが冬の夜空によく合うから、コーヒールなんかをを用意して読みたい。

記憶のすきま

乱暴にかきいだき

涙にも溺れて

あなたの

腕を

つかんで走る

どこまでも翻弄された

日々

太陽と月が

幾度も

行き交い

自分が

自分では

なくなつたような

風と雨が

幾重にも

重なり

そのすきまに

落ちて

苦しかったような

詩に関連して思い出されるのは、芥川龍之介と谷崎潤一郎の文学論争だ。芥川が志向するのは「話」らしい話のない小説であり、一方の谷崎は「構造的美観」こそが小説の特権であると言いつ切る。両者の立場は相反するものであり、ここに大論争が勃発する。そのあたりのことは『文芸的な、余りに文芸的な／饒舌録 ほか 芥川 vs. 谷崎論争』(914/A)に詳しくまとめられているのだが、芥川曰く、「話」らしい話のない小説とは

「それはあらゆる小説中、最も詩に近い小説である。」というこららしい。実際、芥川の『蟹気楼』(918/A1/5-8)なんかは、一種の詩と言ってもいい小説かもしれない。そんな芥川は志賀直哉の『焚火』(913/S2/7)をおすすめしているから、龍之介クラスタはぜひ読むべきなのだと思う。

最後に、もしあなたが詩を書きたくなったら。

「詩なんて人に習うものじゃないし、ノートの隅にでも自由に書けば良い」と言われても困ってしまうと思うので、参考になる本を。

『詩を書くってどんなこと?』(901/WA)は詩を書くことに対して真摯に向き合った本だし、『だれでも詩人になれる本』は一見すると軽薄なタイトルではあるけれど、著者であるやなせたかしの詩に対する愛が溢れている良本だと思う。

ぼくらはせっかく生まれきたこの人生を、無駄づかいしちやもつたいない。シンナー吸ったり、なぐりあつたりして生きたければ、その瞬間は心は集中し、一種の充実感があるかもしれないが、やはりそれは甲虫の一生とさして変わりばえない。ぼくらはホモサピエンスとして、心に情感を持ち、風の音にも涙ぐむリリックな魂を神から授けられたのも、この微妙で繊細なふるえる感受性のよろこびを充分満喫することなしに、どうして生きているといえようか。また人間といえようか。

だからぼくらは歌いたい。

いい詩を読みたい。

音楽を聞きたい。

ただ人生の塵埃の中に埋没して、生きたままの精神的ミイラになってたまるか。

詩を読むということ。あるいは詩を書くということは、世界と向き合うことだ。世界はあまりに混沌としているから、ふと気を抜くと僕たちは明日の方向さえ見失いそうになる。そんな時に改めて言葉で世界を捉え直すことによって、自分自身の位置を確認し、また一歩踏み出すことができればいい。だからみんな詩をポケットに入れよう。そうして世界が少しでもマシになることを願えばいい。